

この国に 生まれてよかった この時代に 生きてよかった

■刻々と増えていった犠牲者の数

あの日の朝のニュースに誰もが自らの耳や目を疑ったに違いありません。私が第一報に触れたのは、NHKの「ラジオ深夜便」の4時台の番組のなかででした。「相模原市の障害者施設で2人が死亡し、数人の負傷者が出ている」が最初の報でした。死亡者は刻々と変わり、6時を回ると、NHKでは「15人が死亡」、民放では「19人が心肺停止状態」としました。あわせて、事故ではなく事件と

し、単独かどうかは不明としながら犯人（現段階では容疑者）の存在を明らかにしました。得体のしれない感情のなかで、ほんやりと食卓に着きました。結果的に、19人もが命を絶たれ、27人が負傷するという大惨事となつてしまいました。

今回は、急きよ神奈川県相模原市の津久井やまゆり園で発生した殺傷事件を取り上げたいと思います。最初に、読者のみなさんといっしょに、あらためて命を絶たれた一人ひとりを心から悼み、負傷者の一日も早い快癒を祈りたいと思います。

第7回 やまゆり園での殺傷事件に思う —「特異な事件」だけでは済まされない

藤井克徳

日本障害者協議会代表・きょうされん専務理事

ふじい かつのり / 1949年生まれ。養護学校教員をへて、日本初の精神障害者のための共同作業所「あさやけ第2作業所」や「きょうされん」の活動に専念。日本障害フォーラム（JDF）や、日本障害者協議会（JD）など、様々な団体の役員をつとめる。



事件が発生して以来、晴れないものがあります。それは、報道が一樣に伝えている「特異な事件」という響きです。たしかに、殺傷の山口や犠牲者の多さ、また容疑者の事件発生前の言動などからみて、特異であり、異常であることはまちがいありません。しかし、すべてを「特異な事件」で片付けていいかどうかです。大事なことは特異な側面とそうでない側面を区別してとらえることです。特異な側面の多くは捜査機関や司直しちちくの手に委ねることになりますが、私たち障害分野としても深く考えるべきです。もう一つの、事件の遠因や温床とも考えられる特異でない側面についてですが、これについては日本社会全体として、とくに障害分野の立場から厳しく検証する必要があります。

■心の傷は日本中に

まずは、今回の事件への障害当事者の反応や感想を紹介します。はっきりしていることは、「心の傷」が日本列島を覆っていることです。「心の傷」は、津久井やまゆり園の難を逃れた利用者や遺族、支援者などの関係者はもちろんですが、知的障害者や精神障害者を中心に日本中の障害者すべてに及んでいます。

事件後、全国からさまざまな感想が寄せられています。障害当事者の声に絞ると、以下の「三つの衝撃」に集約できます。

第一点目は、19人もの殺害を伴う現場からの凄惨な報道による衝撃です。加えて、元職

員とはいえ、自分たちを守ってくれるはずの職員が容疑者であったことが、衝撃を増幅させています。ある事業所からは、「普段、ニュースに関心を示さない知的障害の利用者が震えている」と伝えられました。

第二点目は、容疑者の衆議院議長あての手紙文にある「障害者は生きていても仕方がない」「安楽死させた方がいい」についての衝撃です。身体障害者や精神障害者からも強い反応が示されました。代表的なコメントとして「ナイフの刃先が自分にも向けられているように思えた」「私は殺されなかったが、私の価値にナイフが突き立てられたように感じ

た」などがあげられます。

第三点目は、主に精神障害の当事者に走っている衝撃です。容疑者が精神科病院への入院歴があるとの報道から、精神障害者への偏見や差別意識が増長されるのではという恐れを強めていることです。加えて、措置入院制度の見直しという名目で、病院に長く留められる政策が強化されるのではという不安も広がっています。

■連想した「T4作戦」

事件の全容はなお不明です。これまでの報



▶8月10日に行われた外国特派員協会での会見



▶会見には多くのメディアが詰めかけた